

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

全国の児童養護施設で生活している子どもの 59.5%が被虐待体験という著しい困難を抱え、さらには知的障害、ADHD、LD、発達障害などの複合的な困難を抱えた子どもたちの割合も増加している。こうした状況の中で、児童養護施設を学区にもつ学校においては、こうした子どもたちの対人関係、行動上の問題（困難）が顕在化している。しかし、児童養護施設入所児の成長に欠くことのできない学習支援と教育保証は、これまで、わが国ではほとんど取り上げられてこなかった。

一方で、現在わが国の社会的養護施策は、「施設の小規模化と家庭的養護」を目指しており、地域小規模児童養護施設や里親家庭などの社会的養護のもとで生活する子どもを受け入れたことのない学校が彼らの教育支援を担う機会は確実に増加している。「困難の連鎖」を抱えた子どもの支援では、「教育から支援へ」という視点の転換と、地域における施設と学校のネットワーク作りがますます重要になっている。

本研究は、「施設入所児の育ちのネットワーク」という視点から、施設入所児の教育保障のための「学校－施設」連携、施設入所児と教師の関係づくり、校区に児童養護施設をもつ小学校管理職（校長）交代の影響について、質問紙調査による量的研究と、フィールドワークによる質的研究によって、施設入所児の安定した学びの環境作りが総合的に検討された。この点が、これまでにない独創的なものである。本研究は、児童養護施設と学校教育の実践に還元できる具体的な視点をもとにまとめられており、この点でも意義ある内容となっている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

施設入所児の支援では、「学校－施設」連携が重要であることは言うまでもない。このため、連携・協働の概念を整理し、施設スタッフの施設内連携について量的調査に基づく統計分析から、事例検討を通じた専門職同士の相互理解の重要性などを明らかにした。さらに、専門性の垣根を越えて相互に融合する領域を見出すために、事例分析を用い、「学校－施設」連携のプロセスを分析した。また、施設入所児と教師の関係づくりではフィールドワークを通じたエピソード記述から、校長交代の影響については現象学的テーマ分析からそれぞれ研究を行った。とくに、学校における施設入所児の支援を明らかにするためには、フィールドワークによる質的研究が有効であった。明らかにしようとする事象に合わせたこれらの研究方法は、いずれも当該分野において妥当と考えられる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、施設入所児が抱える困難としての児童虐待について、トラウマ理論やアタッチメント理論、コミュニティ心理学モデルなど広い領域の文献をもとに設定された、施設入所児の成長を支える「施設入所児の育ちのネットワーク」を中心的テーマとして研究が進められた。

全国の施設を中心に質問紙調査を行い、他職種連携・協働の課題と可能性を明らかにするとともに、量的研究だけでは捉えきれない「学校－施設」連携・協働のあり方を、施設を校区にもつ学校の教員や施設職員へのインタビュー調査、及びフィールドワークにおける参与観察から得られた質的データを分析した。これらの手法は、教育と福祉という異なる領域（フィール

ド)におけるさまざまな「関係づくり」のあり方を把握するために適切なものである。とくに質的データは、教員や施設職員へのフィードバックを経てまとめられており、分析のプロセスには十分な配慮がなされている。また、施設入所児等の個人情報保護、フィールドの匿名性も注意深く担保されており、妥当なものである。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究から、とくに施設入所児の学校教育における複数の大人が協力し合う「開かれた支援」が虐待を受けた子どもたちが今後より多くの社会的サポートを得るためのチームによるサポートモデルとなること、困難を抱えた子どもを「排除」するのではなく、「つながる発想とモディフィケーション」による柔軟な対応や、子どもの行動問題を捉える「共視」の視点などが有効であることが示された。また校区に児童養護施設をもつ学校の管理職交代における教育委員会の役割の重要性が指摘されており、これらはいずれも教育実践に資する具体的モデルを提供している。これらの論考は、学会誌(『遊戯療法学研究』『子どもの虐待とネグレクト』『臨床心理学研究』)に掲載された論文(査読)に基づいている。「学校－施設」連携、教師と施設入所児の関係づくり、校区に施設をもつ学校の管理職交代の影響に関する考察は一貫性のあるものであり、十分な学術的水準に達していると評価された。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

社会的養護のもとにある子どもたちの増加と児童養護施設の分散化によって、今後教師は社会的養護のもとで生活する子どもと出会うことが確実に増えることになる。本研究から、施設入所児の育ちと学びの環境作りのために、多職種協働からなる「施設入所児の育ちのネットワーク」を構築していく必要があり、そのための情報共有のあり方、相互の専門性に重なり合う領域を見出すことなど、機関同士の関係づくりのプロセスが明らかになった。学校のフィールドワークから得られた施設入所児と教師の関係づくりの視点も、学校教育臨床分野の研究として十分な意義があると認められる。本研究から、施設を校区にもつ「学校－施設」連携のために教師、学校システム、地域の教育システムの中心を担う教育委員会の対応について、具体的な提言を行ったことも重要な成果と認められる。

以上を総合し、審査員全員一致で本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士(教育学)学位論文としての水準を満たすものと判断した。